

## 対話について

加 来 彰 俊

### (一)

「対話」という言葉は、最近の流行語の一つである。選挙で選ばれた地方公共団体の首長たちのなかには、地区住民との対話ということを何か大切な職務であるかのように考えて、就任の挨拶のなかにこれを加えている者もあるし、また、「何々についての対話」とか、「何某対話集」などという表題をもった書物が、かなり出版されたりしている。「対話」の重要性があらためて認識されたというような風潮である。

しかしながら、この「対話」という言葉は、現在、どのような意味で用いられているのであろうか。それは簡単に「話し合い」というほどの意味に、つまり、一人で自分の意見ばかりを述べるのではなく、相手の言い分をも聞いて、互いに意志の疏通をはかるというほどの意味に用いられているのではないかと思われる。そしてたしかに、そのような意味だけでも、「対話」のほうは「独話」よりもまさっていると言えるかもしれない。なぜなら、対話においては、人は自分の考えを一方的に相手に押しつけることは許されず、相手の言い分も聞いたり、批判や反駁も受けたりして、自分の考えに反省を加え、誤っている点はこれを訂正することも可能となるからである。つまり「対話」というのは、言論の世界における一種の民主政治なのであって、「お説ご尤も」と他人の意見をただ拝聴するだけの、「独話」のもつ専制政治に比べれば、はるかにましだとも考えられるからである。

しかしながら、対話のもたらすそのような効果は、むしろ、二人の人間がたんに話し合いをするということだけから自然に生まれてくるのではない。対話が所期の成果を収めるためには、それが一定のルールに従い、順序正しく行なわれることが必要であろう。ところが、その点についての反省と自覚が、現状ではどの程度なされているのか、たいへん疑わしいように思われるのである。というのは、われわれが現に世上に流布している「対話」とか「対談」とか銘打った記事や書物を読んでみると、そこには二人の人間がただめいめい勝手に自分の意見を述べているだけで、両者の議論はしつくりと噛み合っており、本来の「対話」は行なわれていないように見える場合が多いからである。すなわち、そこに見られるのは、話し手が一人から二人に変わっただけの、複数のモノログであり、戯れた言い方をすれば、デュオログ (duologue) ではあっても、ダイアログ (dialogue) にはなっていないものがほとんどだからである。だから、それらの対話なるものは、実は、二人の意見のたんなる寄せ集めにすぎなかったり、あるいは、一方の人が他方の人の話にときどき相槌を打って、お世辞や追従を述べるだけであったり、または、双方の主張は平行線をたどったまま、何の結論も生まれないただの言論の争いに終始しているだけなのである。しかも対話者たちは、あれからこれへとたえず話題を転換して、にぎやかに話し合い、その

間に話題の一貫性を保つ努力をしないのが普通であるから、その対話には議論のほんとうの展開や発展は見られず、また論理性にも欠けている場合が少なくないようである。

したがって、そのような対話を読まされる側のわれわれにとっては、結局、何か漠然とした印象や空しい思いだけが残って、対話の利点というものを何も感じることができない場合がしばしばなのである。むしろ、当の対話者たち自身にとっては、ちょうど食後の雑談や漫談のように、そのようなとりとめのない話し合いでも、結構たのしいものであるうし、自己満足のゆくものではあろうが、しかしそれだけにまた、局外者であるわれわれ読者には、大きな不満が残るというわけである。だから、読者の立場からいえば、もし対話者たちの意見をj知ることだけが目的なら、何もむりに対話の形式に盛り込んで、こんなにも雑然と語られたものをではなく、むしろ論理的に整然と秩序づけられた主張を、その人の著書や論文の中で読むほうがましであると感じるくらいなのである。われわれが世に出ている多くの「対話」なるものを読んでいて覚える不満は、ちょうど民主的な討議の席において、各人がめいめい勝手な意見を吐いて、わいわい言い合いながら、いっこうに埒があかないでいる状態に感じるもどかしさと、ある意味では似たところがあると言えるかもしれない。そしてそのような際には、だれかすぐれた識見をそえた人が始めから最善の案を出してくれば、ほかの者はみんな黙ってその人の提案に従うほうが能率的であったのに、というような気持ちになりがちのものである。しかしそれでも、われわれが言論の独裁を嫌い、民主的な討議をよしとするのは、その討議において、議長とか司会者とかがたえず議題の本質に目を向けながら、人々の意見を整理して、それによって議論が論理的に展開して行き、そして出席者たちの少なくとも大部分の者が、みずからの自由な意志によって承認できるような結論がそこから生まれてくるならば、という条件をおいてのことであるといえよう。

そこで対話の場合にも、それが上に言われたような欠点を克服して、所期の成果を収めるためには、やはり何らかの対話のルールなり、条件のようなものがなければならぬように思われる。むしろ対話は、二人の人間の間で行なわれるのであって、会議の場合のように、議長とか司会者とかいうような才三者が介在して、対話のあり方を規整するわけではないから、その対話のルールというのは、対話者自身の自覚と節度によって自主的に守られるのでなければならぬだろう。しかしそれでは、その対話のルールというのは、いったい、どのようなものであろうか。

## (一)

現在の対話の流行について、論者のなかには、その起源をソクラテスの問答法やプラトンの対話篇にまで溯りながら、「対話」にあたるギリシア語は「ディアロゴス」であって、その語義は「ロゴス(言葉、言論)を分けもつこと」だなどと気の利いたふうな口をきき、学のあるところを見せようとする者がいる。しかし、「対話」とは「ロゴスを分けもつこと」、つまり「話し合うこと」だと言ってみて

も、それだけではむろん同語反復にすぎず、何の説明にもなっていない。問題は、その「話し合い」がいかなる仕方で行なわれるべきかということにあるのであって、ソクラテスやプラトンの名前を出すのなら、彼らの「対話法」(問答法)のあり方を具体的に説明すべきであるが、その点については論者は何も語ってくれないのである。それはおそらく、その論者は正確なことを何も知らないからである。が、知らないことには言及しなければよさそうなのなのに、そうせざるをえないところが、評論家という職業の気の毒な宿命なのかもしれない。それはともかく、「対話」といえば、人はすぐにソクラテスやプラトンのことを連想するのが普通であるから、彼らの「対話法」(問答法)の主なる特色について次に簡単に説明しながら、それが今日なお対話のルールとして参考になる点をもっているかどうかを、少しばかり考えてみることにしたい。

※ここでは、プラトンの初期対話篇のなかにみられるような、吟味・反駁(エレノコス)を目的とした議論の方法としてのソクラテス的問答法についてだけ説明し、プラトンの中・後期対話篇に現われる、哲学そのものとして考えられているような問答法には触れない。まずオーに注意すべきことは、ソクラテスやプラトンのいう「対話」とは、正確にいえば、「問答」であるということである。つまり、対話者はたんなる話し手と聞き手という関係にあるのではなくて、問い手と答え手という役割にはっきりと分れているということである。しかもその問答において、積極的な役割をつとめるのは問い手の方であって、対話の進行はもっぱら問い手のリードによるものであることが忘れられてはならない。ソクラテスの本領は、この問い手としてのすぐれた力量にあったのである。

それでは、問い手は何を問うのか、どこから問いを引き出すのかといえ、それは答え手の主張する命題からである。つまり問い手の方は、その命題について自分自身の意見なり批判なりをもっているにしても、それをすぐ相手にぶつけることはしないで、自分の考えはひとまず心のなかにしまっておいて、まず、相手(答え手)の主張する命題に一応同意し、それが真であると仮定(前提)することから始めるのである。そしてその上で、次に、その前提から一つの結論を引き出して、この結論を相手が認めるかどうかを訊ねるわけである。ところで、この質問に対して、答え手の方は、「イエス」か「ノー」かを答えることになるが、質問の意味がはっきりしないとか、推論の仕方が不正であるとかいうような場合を除いては、原則的には、それ以上の余計な答え方をすることは許されないのである。それは問答のなかに余分なものをもちこんで、議論の本筋を乱すことがないようにするためである。そして、「ノー」と答えられたときには、前提に矛盾した結論がもうすでに出てきたのであるから、その前提は破棄され、答え手の主張は間違っていることになり、そこで問答は終るが、「イエス」と答えられた場合には、先の結論を前提にして、それからさらに次の結論をみちびき出し、それについての諾否の返事を求め、以下、同じようなやり方をつづけて行くわけである。そして、このようにして問答をつづけて行った結果、最後に、答え手がある「イエス」とは答えにくいような不合理な結論が出てくるか、あるいは、答え手が「ノー」とは言いたくなくて返答に窮してしまえば、答え手の最初の主張は反駁されたことになるし、逆に、どこまで質問を重ねて行っても、答え手は返答に困らず、不合理な結論

も出てこない場合には、答え手の主張は正しいものとして承認されるわけである。(ただし、問答法の本来の目的は、前者のように、問い手が答え手を自己矛盾に追いこんで、答え手の主張を論駁することにある。)かくて、この問答法による対話では、その対話の全体が一問一答を単位とする短かい議論に分割されながら、しかもそれらの議論は、答え手の主張する最初の前提から最後の結論にいたるまで必然的な推論によって結ばれた一つの連鎖をなすことになるわけである。つまり、そのような論理的な首尾一貫性が、問答法による対話の重要な特色の一つなのである。

### (三)

むろん、問答法そのものの説明としては、まだまだ多くのことが残されている。たとえば、この問答法を学問の本来の方法である論証法や、あるいはレトリックの方法と比較考察することも、その方法の特色を明らかにする上では必要だろうし、さらに、問答するにあたって対話者に要求されるいくつかの基本的な心構えのことなどにも触れなければならないだろう。しかしながら、問答法そのものについての詳細な説明をするのがこの小論の目的ではなく、ここで問答法に言及したのは、それが現代の対話のあり方を反省してみる上で、何らかの参考になりはしまいかという意図からだったのである。そしてそのような意図からすれば、問答法についての上述のような簡単な説明からだけでも、現代の対話者たちには重要な示唆があたえられるのではないかと思われる。

すなわち、それはまず、ほんとうの対話が行なわれるためには、現在よく見られるように、二人の人間がただたんに交互に話し手になったり聞き手になったりして、互いに意見を述べ合うということだけではいけないし、また、その道の老大家らしい人物が主な話し手になって、相手方の若いほうはもっぱら聞き役に廻り、ときどき相槌を打ったり、お世辞を言ったり、あるいは、分らない点は説明を求めたりするだけでもいけない、ということなのである。なぜなら、前者の場合には、両者の議論はほんとうには噛み合わず、双方が一致して確認しうるような結論が、論証の必然性にもとづいて生まれてくることはほとんど期待されえないからである。また後者は、学生が先生から教わる形式の対話法であって、それは昔から問答法とははっきり区別されているものだからである。というのは、問答法においては、先にも言われたように、「イエス」とか「ノー」とか答えるのは、聞き役ではなくて、むしろ話し手の方だからである。老大家に敬意を払うことと、権威を恐れずに敢然と質問することは別であり、話相手が大家だからといって、その人の話に調子を合せて追従していたのでは、ほんとうの対話にはならないのである。その点では、ソクラテスがプロタゴラスやゴルギアスなどのその道の老大家に対して取った態度を、若い対話者は見ならうべきであらう。

したがって、ほんとうの対話が成り立つためには、対話者たるものは、たんなる話し手と聞き手という役割にとどまるのではなく、さらに進んで、問い手と答え手という役割をもっと自覚的に果すべきであらうと思われる。むろん、すべての対話が、相手の主張を反駁し

たり、言論の勝負を争うためになされるわけではないから、本来の問答法にみられるように、対話者が問い手と答え手との二つの役割に完全に分れて、その役になりきるといふことはのぞめないかもしれない。しかし現状では、対話者の役割の自覚があまりにもあいまいで、いわゆる「おだやかな話し合い」ということが理想化されすぎているのではなからうか。

ところで、このように問い手と答え手の役割を自覚するということが、対話者をして互いに相手の論点に意識を集中させて、論理的に首尾一貫した議論を展開させることにも、大いに役立つであろうと思われる。世上に流布している多くの対話の事物を読んでおぼえる不満は、話題があれからこれへとたえず移り変って、その間の前後の脈絡が必ずしも明らかではなく、また思考の論理性にも欠けている点にあることは、前に指摘したとおりである。しかしながら、対話の効用は、対話者各人の多彩な意見や、あるいは両者の意見のたんなる相違が明らかになるという点にあるのではなくて、両者が話題になっている事柄について質疑応答を重ねることによって、両者の意見はどこまで一致するか、またどこからは分れるかを、相互に説得し合い、確認し合うことにあるといえよう。そしてそのためには、対話者はできるだけ話題をしぼって、その限定された話題について質疑応答を交しながら、論理的に首尾一貫した議論を展開することが大切なのである。

まさにそういう意味で、現代の対話者たちに、ソクラテスやプラトンの問答法のテクニックを、もう一度よく勉強し直してもらいたいように思うわけである。しかしながら、いまのわが国では、論証法が中心となるべきはずの学者の書物も、レトリックの方法が主として用いられているとみえる評論家の書物も、そして本来は問答法によるべきだと思われる「対話」の書物も、どれもみな性格があいまいになって、区別がつかなくなっているのが実情であるから、まず、議論の方法そのものについて、それにはどんな種類があり、どんな原理によって区別されるかを学ぶほうが、それよりも先のこともかもしれない。(弘前大学教授)